

人権作文コンテスト 入賞作品

優秀賞
最優秀賞

『言葉は心にのこる』

加茂小学校5年 本谷 健人さん

ぼくは、ある日お姉ちゃんとケンカをしました。カッとなったお姉ちゃんは、突然「死ぬ」と言っていました。お母さんが「今何て言った？」と言いながら近くにきました。お母さんは、とても悲しい顔をして泣いていました。泣きながら、お姉ちゃんをしかつていました。
お母さんは「その言葉は、人の心を深くきずつけるし、言われた人がずっと覚えていて、その人を大切に思っている人達まで悲しませてしまうんやで」と言っていました。
言われたぼくは悲しかったけど、ぼくの事を大切に思ってくれている人達まで悲しませてしまう言葉があるんだと知りました。

お母さんは、ぼくとお姉ちゃんに「あなた達がその言葉を言う人にはなつてほしくない」と話してくれました。

その言葉を聞いて「死ぬ」という言葉は、ただおこった気持ちをぶつける言葉ではなく、人の心に大きなきずを残す言葉だということを知りました。

紙にむかってひどい言葉を言いながら、えんぴつで穴をあけました。ぐしゃと丸めて、ごめんなさいとあやまりました。その紙を広げても穴はふさがりません。言われた人は、いいよって言うてくれても、そのきずは、薬や、ばんそうこうではなおせないし、一生のきずになる事をお母さんが教えてくれました。
お母さんが泣いたのは、ぼくを守るためじゃなくて、お姉ちゃんがそんな軽い気持ちで使ってしまった事が悲しかったんだろつなと思いました。

人を悲しませる言葉は他にも、たくさんあります。だから、だれかに何か言うとき「この言葉を自分が言われたらどう思うかな」と考えられるようになりました。でも、まだカッとなった時に悲しませるような事を言うてるかもしれない。いやな気持ちになると思ったら、別の言葉を探します。「死ぬ」という代わりに「今は1人にして」「ちょっとおこってる」と、自分の気持ちを正直に言えば、相手をきずつけずにすみます。



言葉は目に見えないけど、心に深くのこります。悪い言葉は心を暗くします。いい言葉は人を笑顔にします。だからぼくは、人をおとすような言葉ではなく、元気にする言葉を選びたいと思います。お母さんが泣いたあの日を忘れずに、やさしい言葉を使える人になりたいです。ぼくのまわりの人達が安心して話せるようにしたいです。

優秀賞

『万博でのバリアフリー』

多田中学校2年 熊本 のどかさん

夏休みを利用して、私と母と妹の3人で、大阪・関西万博に行きました。その時感じたバリアフリーについて、書きたいと思います。母は、線維筋痛症という病気を患っており、長時間の歩行や列に並ぶのは負担になるので、杖を使用しました。どのバリアフリーから回るのが、休憩や食事場所はどこにするかなど、3人で話し合いながら決めました。計画を立てる時間も、私にとっては、初めての万博ということもあり、とてもワクワクする楽しい時間となりました。

会場に到着すると、入口で係員の方が母に気付き、優先ゲートに案内してくれました。スムーズに入場できたことにとても安心し、心の中で「こういう配慮があると、体が不自由な人も楽しめるな。」と感じました。

会場内を回ると、多くの海外のバリアフリーは、細かい配慮が行き届いていました。妊婦さんや障がいがある人、サポートが必要な人でも安心して見学できる優先レーンがあり、誰もが快適に楽しめるよう工夫されていました。車椅子でも体験できるコーナーや、列の流れを調整する案内など、細部にわたる配慮に驚きました。母も笑顔で「こういう工夫があると利用しやすくていいね。」と話してくれました。

一方、日本のバリアフリーでは、まだ十分な配慮が行き届いていないと感じる場面が多くありました。優先レーンを設けていない日本バリアフリーも多く、優先レーンがあっても杖をついている母と介助者である私の2名までという人数制限がありました。

とある日本のバリアフリーを訪れた際、日本のバリアフリーの遅れについて、実感する出来事がありました。そのバリアフリーは、優先レーンで予約していたこともあり、とてもスムーズに入場できました。バリアフリー内にも優先レーンがあり、人が多くてもこれなら母も安全だなと思っていました。しかし、優先レーンは看板とテープの柵が所々にあるだけなので、元気な子供が母の横を勢いよく走り抜けるなど危ない場面がありました。近くにスタッフさんの案内もなく、転倒の恐れもあるので、足早にそのバリアフリーから退出しました。

世界中から様々な人が集まる万博だからこそ、誰もが楽しめる工夫がさらに広がることを願っています。

今年度も多くの小・中学生の皆さんから、ご応募いただきました。

その中から入賞されました3作品をご紹介します。

優秀賞

『ワンワールド・ワンプラネット』

陽明小学校3年 橋本 航さん

ぼくは夏休みに、大さかで開さいされている大さか・関西万博に2回、家まで行きました。はじめていった時は、たくさんのいろんな形のたて物や、月の石や、人が作った細ぼつで作られた動く心ぞうを見て、すごいなと思いました。そしてミヤクミヤクといっしょに写しをとったりしてとても楽しかったです。

2回目に行った時に、お母さんに

「ここを見よう。」

と言われて、ウクライナのバリアフリーを見ました。そこは「モンズ」という、いろんな国のバリアフリーが集まっているところでしたが、ウクライナは他の国より、とてもならんでいる人が多かったです。たくさんの方が気になっている国なんだと思いました。そこでは今のウクライナのえいぞうを見ました。いつ落ちてくるかわからないぼくだにヒヤヒヤしながら、毎日をすごしていたり、学校のまどガラスがぼくだんでわられて使えなくなつて、地下を走る電車のえきでべん強をしているウクライナの人たちのえいぞうでした。ぼくはしんじられませんでした。ぼくのすごしている毎日とは全然ちがったからです。

「でもこれは本当のことなんだよ。」

と、お母さんが言っていました。

そして、ほかにも今、ウクライナのようにせんそうをしているパレスチナという国のバリアフリーも見ました。

「パレスチナのガザ地区という場所が大きなひがいをうけているんだよ。」

と、お父さんが言っていました。ぼくはウクライナのバリアフリーを見ておどろいていたので、どんなバリアフリーなのかと少しこわい気持ちでした。でも、行ってみるとせんそうのことはまったく感じられませんでした。ぼくたち日本人にとって、パレスチナというとガザ地区、ガザ地区というとせんそうというイメージが強いので、わざとそういうことを思わせるんじはしていません。バリアフリーの人が言っていました。せんそうによって人や物のい動がとてむずかしくて万博が開く初日には、てんじ物が何もとてなかつたそうです。

ぼくにとって、この夏の万博は、楽しいだけでなく、せんそうについて考えるきっかけ

になりました。今まで考えたことはなかつたけれど、今も世界ではせんそうがおきているんだと強く感じました。この大きな大屋ねリングの中では、どの国もたたかわないで、バリアフリーの人、バリアフリーに来る人もみんな楽しそうでした。本当の世界でも、どの国に住んでいる人もみんな楽しく毎日をすごせたらいいなと思いました。

帰る前に見たドローンショーで、「ワンワールド・ワンプラネット」という文字が空にかびました。次の日に、その言葉の意味を調べました。「ひとつの世界、ひとつのわく星で、みんなが同じ空を見上げて、同じねがいをきょう有する」というメッセージがこめられているそうです。ぼくだんにビクビクしながらみるねずみ色の空じゃなく、みんなが世界の平わという同じねがいを抱いて見上げるきれいな空になつてほしいなと思いました。



いなと思えました。日本のバリアフリーでも、海外バリアフリーの取り組みから学べる人が多いと感じました。

この体験を通して、バリアフリーとは、母のような杖をついた人、車椅子の人、妊婦さん、小さな子供を連れた家族や高齢者の方、誰もが暮らしやすい生活を送るための社会全体の配慮だと考えました。誰か1人のための小さな配慮も、結局は「みんなのための優しさ」につながるのだと思いました。

万博は未来を描く場所です。だからこそ、未来の社会が「誰もが安心して楽しめる社会」であつてほしい、最新の技術や建物も大事ですが、人々を思いやる気持ちも未来を形づくる力になる、と私は思います。これから先、日本が世界に誇れるバリアフリー先進国になるために必要なことは、この人々を思いやる気持ちであり、そのために私自身もまず身近なところから思いやりの行動を心掛けていきたいです。いつか日本が「バリアフリーで誰もが生活しやすい国」として世界中の人々から記憶されることを願っています。

